

An abstract painting featuring a large, stylized face in the lower-left corner, rendered in warm, earthy tones. The face has large, expressive eyes and a prominent nose. Above the face, there are flowing, draped fabric-like shapes in shades of yellow, orange, and red, creating a sense of movement and depth. The overall composition is layered and textured.

アポロンの島

小川国夫

角川文庫

角川文庫

アポロンの^は島

昭和四十六年十月三十日
昭和五十年四月二十日
初版発行
六版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著者 小^{*}川^が国^こ夫^{*}

発行者 角川源義

印刷者 市川市湊新田六十一
橋本伝四郎

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式会社 角^{かど}川^{かわ}書^{しょ}店^{てん}
①一〇二 ②東京一九五二〇八

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan 新興印刷・本間製本

0193-131101-0946(1)

アポロンの島

他三篇

小川国夫



角川文庫

目次

エリコへ下る道

枯木

貝の声

エリコへ下る道

重い疲れ

アポロンの島

ナフプリオン

寄港

五二

七二四九

スイスにて

シシリ―島の人々

エレウシスの美術館

アポロンの島

動員時代

海と鰻

箱 船

東海のほとり

雪の日

お 麦

夕日と草

五 六 七 八 九

一 二 三 四 五 六 七 八 九

動員時代

一九

大きな恵み

海の声

一九

遊歩道

一九

大きな恵み

二〇

ボス

二〇

大きな森

二〇

あとがき

二三

解説

三五

饗庭孝男

エリコへ下る道

枯 木

市は山の中腹に建てられていて、牢は市の上の外れにあった。その日も、夜が明ける前に、驢馬の鳴き声があちこちに起った。彼は独房に微光が来ると起きて、ゆかに指でなにか書いていた。いつの間にか夜は明け放たれていた。兵隊が来た。そして、一人が、うずくまっている彼に

——起て、といった。

彼が立ち上ると、兵隊は彼の足元にしゃがんだ。足枷をはめるのだ。はめ終ると、兵隊は剣を抜いて、彼の両足の親指の爪をはがした。その日の最初の血が流れた。血は廊下の灰色の石の上では黒っぽかった。そして監獄の門のひなたでは赤かった。つめかけた群衆は静まった。

坂はそこから始っていた。刑場は谷底で、雛菊の谷とよばれていた。

彼は、一步一步、坂を下りたが、足枷の、鎖についた鉄の玉に始終せきたてられた。そして、時には足をとられてころんだ。彼がころぶと、兵隊達は止って待っていた。彼は一人で起き上った。鉄が喰い込んで、くるぶしの上の皮膚は破れていた。

敷石道が終った。そこから坂は更に急になった。しかし群衆はへらなかつた。

彼は土へ第一歩を踏み出した時よろめいた。立直ろうとしてひどくころんだ。彼はしばらく起き上らなかつた。兵隊達は彼のまわりに、黙って立っていた。彼は目を閉じていた。兵隊の一人が酔を飲ませようとしたが、彼は顔をそむけた。兵隊は器を彼の口へ押しつけた。彼は

——やめろ、といった。

兵隊は薔薇の太い枝で彼の背中を打った。

——やめろ、とまた彼がいった。

兵隊は彼を続けて二回打った。一回目は頸筋に、二回目は顔に、痕をつけた。彼は立上った。彼は正面を、すなわち、向いの崖とその上の空を見て、立っていた。二、三人の若い兵隊は興奮していた。

彼はまた歩き出した。人々は、彼がいつまで歩けるか、と思っていた。ころぶのを期待している人と、ころばないように……と知っている人があった。彼はころびそうになると立止って、しばらく息をしていた。群衆の差し出した布切れを顔に当てて、仰向いて、顔をおさえていたこともあった。

——あの人が死んだ。死刑にされたんです、と少年がいった。男は黙っていた。少年は男を見ていた。やがて男はポツンと

——そうか、といった。

——二人で明け方湖へ下りて行った時をおぼえていますか……。あの時、あの人は抜けるように青白い顔をしていましたね……。でも、大きい手は暖かった……。と少年がいった。男はうなづいたきりだった。その様子は、自分を手ばなしで風になぶらせているようだった。風は平原をゆるく動いていた。

——あの顔には血と汗が一杯でした。そして、何回も鎖についた鉄の玉に足をとられながら、私たちに近づいて来たのです

——フィロメナは……、嘆いたろう……。と男は地平線の山を見たままでいった。彼女は男のいいなずけだった。そして少年の姉だった。

——ええ、お母さんと二人で、あの人に布切れを渡したのです

男はうなづいた。少年は続けた。

——あの人はきれで顔をおさえて、しばらく立っていました。坂を下りるようにせきたてる鉄の玉の重みを、泳こもえていたんです……。きれを顔からはがすようにとると、フィロメナにかえしました。そして《生木でさえこの通りだ。枯木はどうなるのだろう》と呟いたのです

男は胸を突かれたように、なにもいわなかった。

男は腰掛けていた柵から地面へ下りると歩き出した。草を喰べていた羊が途をあけた。少年も柵から下りると、男に追いつがって行った。

——フィロメナはあの人に、なんにもいわなかったのか……と男がきいた。

——いいませんでした。いえなかったのです、少年はこたえた。

——私だって喉に蓋が閉ったようでした。あの人体が中でしている息を聞いていたんですそれから、二人はしばらく黙って歩いていました。

——私はあの人を咬いた言葉を考えているのです、と少年がいった。

——どういうことでしょうか……

男はこたえなかった。しかし、彼は暗い顔を少年の方に向けていた。少年は男のいうのを待つていたようだったが、

——あの人死んだことが信じられますか……ときいた。

——そうだ、死んだとすれば、一遍生れかけた大きな物が、また土の下へかくれてしまったんだ、と男は、唐突に大きい声でいった。

——ユニア、俺たちは死なないようにするんだ、と男はいった。

——そうです、少年は頷いた。そして

——あの人は、鉄の玉に引ずられて倒れないように、一歩一歩、谷底へ下りて行きました、と
いった。

貝の聲

——コニヤックをもう一杯くれ……。子供か……。子供を見たらもう駄目だな

——本当ですね旦那

——映画だって、子供が出て来たら、もう駄目だ

——可愛いですね、旦那は子供さんはおいくたりで……

——一人あつたんだ、無くしちゃったよ……

——それは、お辛かったでしょう……

——……。あんた子供は何人だ……

——一人です、旦那。女の子で……。シャルロットっていうんですがね……

——学校へ行ってるの……

——ええ、二年生ですよ

——コニヤックをもう一杯くれよ

——へえ……。失礼ですが、旦那は拳闘家で……

——わかるかな……

——どうも御様子で……

——バーテンがそういうと、ジャンガストは、何かを見詰めながら、笑った。

——もう一杯くれ……、そこに置いてあるのはどこの貝……

——ああこいつですか、私が兵隊でマダガスカルへ行った時、持って帰ったんですよ

——ちょっと、見せてくれ

——奇麗なものですよ……、へえ、どうぞ

——なかなか重い

——全くですな、持って来る時は面倒ですが、あとで思い出になりまさあ

——ここが欠けているな

——いや、手に入れた時からそうになっていたんで、惜しいですよ

——もう一杯

——へえ、旦那

——貝殻の色つてのは褪せないものだな、海にある儘だ

——へえ、全く……

ジャンガストは、夕刊を読んでいる浩の横顔を、見詰めていた。バーテンはそれが気になった